

岐阜県支部だより

○巻頭言

○支部研修会報告

・第3回、第4回、第5回研修会

・NEW 学校カウンセラーコーナー

巻頭言 「教育相談学会とのかかわり」

日本学校教育相談学会岐阜県支部 副理事長 平林克友

◆教育相談学会との出会い

私が、最初に相談学会に参加したのは当時の職場の上司から誘われて参加した平成8年(1996)2月の講演会でした。当時の私は、公的相談機関で不登校児童生徒や保護者の教育相談を担当していました。それまでは高校の教師として、学校現場で不登校生徒と接していました。当時の高校での不登校生徒は、年間の約1/3の欠席日数を超すと留年や休学、退学の選択を迫られることになります。しかし、現実には留年や一定期間の休学を経ても結果的に学校復帰した生徒はなく、多くの生徒は退学をしていきました。学級担任としての無力感を感じていた頃でした。高校教師をしながら、地区の小中学校の先生方と、生徒理解を深めるということでカウンセリングの研修会に参加したのもこの時期でした。そして、職場や自分の立場が変わって、新たに岐阜県支部で学ぶ機会を得ることになったのでした。

◆岐阜県支部での学び

研修会に参加をしたことで、現場(小・中・高)の多くの先生方との交流で、多くの気づきを与えられました。年間5回の研修会は、自分の都合が良い回に参加できるという気安さもあって、現在まで長く継続できたように思います。そして、回数を重ねるに連れて、事例提供を勧められ、平成10年(1998)の12月に初めて発表をしました。とても緊張しましたが、その一方で

自分自身のふりかえりと、他の先生方の意見を聴くことで違う視点で事例を見直すことができました。その中には、自分が抱えていたことに対して共感して貰えたことも含まれており、児童生徒と同じように自分で気付けたことが、参加して最も良かった点だと思っています。

◆今後の取り組み

岐阜県支部では、会員の高齢化が進み、新規の会員数も停滞していることから、「今後のあり方委員会」を立ち上げて、これまでの活動の見直しを検討してきました。委員会では、研修の内容や雰囲気、会場の設定の見直しなど、提言としていくつかの課題が出され、その一つとして昨年度からグループ交流を行うようになりました。参加された方同士が、個々の感じていることや考えていることなどを出し合う時間です。これはとても好評でした。さらに、今年度の夏期研修では、休憩時間を活用した立食形式の交流会も計画しています。

過日、大学の恩師から「一以貫之(いちいかんし)」と書いた色紙をいただきました。論語に出てくる言葉です。先生から私への激励の言葉だと受け止めています。心の支えは、いくつになっても必要と改めて感じました。会員の先生方や多くの県内の先生方と共に、児童生徒の心の支えとなる教師を目指し、地道に研鑽したいと思います。岐阜県支部で一緒に学びましょう。

☆支部研修会報告☆

◇第3回 研修会

開催日 : 2023年10月21日(土)
実施形式 : ハイブリット開催
会場 : 南部コミュニティセンター

◎全体会 14:00~14:20

1. 理事長あいさつ
2. 夏の研修報告

◎行政説明 14:30~15:45

「生徒指導提要を受けた岐阜県の方角性」

岐阜県教育委員会学校教育課
教育相談係課長補佐 稲葉 征司先生

この講話では、「生徒指導提要を受けた岐阜県の方角性」について、稲葉先生に分かりやすくまとめたいただき、今後何を大切にしていこうとよいのかについて教えていただきました。



新しい生徒指導の目的は『一人一人が自己理解をし、自己指導能力を身に付けること』であり、そのためには、ありのままに自分を認めること。自己に対する洞察力を深めることが必要となります。

この『自己指導能力』を育成するためのポイントとして(自己存在感・共感的な人間関係・自己決定の場・安心、安全)の4つの重要性を挙げられました。そしてそれだけでなく、我々は常に『対象の児童生徒のみの問題なのか。周りの生徒ができたことややるべきことはなかったか。』という視点をもつことも大切なポイントになることを知りました。

不登校の児童生徒数は、前年度20%増とな

っており、さらに、その中でも、学校外、内、どこにも相談を受けていない児童生徒の増加が問題となっています。

また、不登校となるきっかけはそれぞれですが、学校から離れる期間が長くなればなるほど、登校できない理由が、「勉強が分からない」ことに変わっていくことから、欠席中の学習指導が次へのステップを開くカギとなるそうです。

『学びに繋がらない子どもたちを「0」にしていく』これが、これからの最重要課題であることを教えていただきました。今後は、ICTの活用をさらに推進させ、学校内教育支援体制の改革を行うことが急務であると改めて感じました。そういったことも、この教育相談学会で情報交流していきたいです。(文責:木村 由紀)

◇第4回 研修会

開催日 : 2023年12月9日(土)
実施形式 : 対面開催
会場 : 美濃加茂市生涯学習センター

◎全体会 13:30~13:45

1. 理事長あいさつ
2. 前回の研修会報告

◎実践紹介 13:45~14:20

「外国につながる子どもの心の支援」 可児市立蘇南中学校 青山岳史先生

勤務校で「国際教室」を担当してみえる青山先生から、「可児市の特徴」「勤務校の国際教室の実態」「学校の役割」「日本語習得の支援」

「心の支援」について日々の実践を紹介していただきました。

外国籍の児童生徒は「言葉や文化の違い」だけでなく「複雑な家庭環境」や「不安定な経済状況」の家庭が多いことで、学校生活だけでなく家庭生活にもストレスや不安を感じている場合が多く、学校の中で「所属感」や「達成感」

「安心感」を補償することが大切になるという話が印象に残りました。また、日本語習得を支える際に、「生活言語」と「学習言語」に分けて現状を捉えるという話もとても大切な視点だと感じました。

参加者からは、「自分の地区との違いに驚いた。」「県内どこでも、可児市のような状況になることも考えられるので、今回紹介していただいたことを知っておくことはとても大切だと思います。」などの感想が聞かれました。

◎事例検討会 14:30～15:30

実践紹介を受けて、同地区の小学校に在籍する外国籍児童への支援についての事例検討会を行いました。

参加者からは「外国籍の児童だけでなく、その家族も含め、複雑な心境で生活している場合が多く、そこに寄り添うことで、まずは『この人は信頼できる』と感じてもらえるような接し方が大切だと感じた」などの感想が聞かれました。

◎グループトーク 15:30～16:00

最後に、参加者によるグループトークを行いました。日々の実践の悩みや今回の研修の感想など幅広く聞き合う機会になりました。

(文責：郷田 賢)

第5回 研修会

開催日 : 2024年2月17日(土)
実施形式 : 対面開催
会場 : 市橋コミュニティセンター

◎ 全体会 13:30～13:50

1. 理事長あいさつ
2. 第4回研修会報告

◎ グループトーク 13:50～14:20

◎ 学校カウンセラー講話 14:20～14:55

「養護教諭の経験を生かした

学校カウンセラーとしての活動

学校カウンセラー 曾我部 恵美先生

曾我部恵美先生は、30年以上養護教諭として小中学校に勤務され、現在スクール相談員として児童生徒の支援に携わっておられます。

養護教諭のころに出会った保健室登校や不登校の子どもとの関わりを、学校教育や教育相談の変容に沿って紹介されました。先生は、スクール相談員の役割を①子どもの見守り、心の安定を図ること②相談室での関わり③不登校の未然防止と捉え、活動の様子を話されました。トイレットペーパーアートや靴下廃材工作などの作品作りは、児童生徒が集中して取り組むことで、気持ちを落ち着けられたり、作品が出来上がった達成感を味わえたりして、子どもたちの心のケアに繋がるものだと感じました。曾我部先生の豊富な教育現場での経験と子どもに対する優しさ、愛情を感じる講話でした。

◎ 実践事例紹介 15:00～16:00

複雑な悩みを抱える児童生徒の支援

～ケース会議、連携のあり方～

古田 信宏先生

子供の変化に気付いたものの、家庭の生活環境まで踏み込めないもどかしい状況は、学校現場でよく起こります。今回提供された事例は、「ヤングケアラー」の認知が世間的に低い頃の中学生のものでした。具体的な支援の見通しがつくまでの期間を振り返り、学校の体制や関係機関との連携について、小グループに分かれケーススタディをしました。グループが学校関係者、心理職・相談員、福祉関係に携わっておられた方など立場の異なる方を組み合わせて構成されていたので、多様な視点で意見交流がされました。

事例を提供された古田先生からは、生徒の背景がはっきりすれば、生徒の見方が変わり生徒理解が深まると教えていただきました。

複雑な課題を抱える事例では、他職種との協働が鍵になると思います。自分の専門以外の方のご意見は、新たな課題解決の糸口に繋がることを実感する会になりました。



(文責：佐々木 文枝)

NEW !

☆☆☆ 学校カウンセラーコーナー ☆☆☆

学校カウンセラーとして

幸脇 弥生先生

私は教職経験の後、公認心理師の資格を取り、2020年からスクールカウンセラーの仕事を始めました。

先輩や同僚からの言葉や手本、経験を重ねつつ、自分なりの児童生徒支援を目指しながら今に至ります。

1 個別支援と集団アプローチ

カウンセラーは面談が中心ととらえがちですが、私は教職免許をもったカウンセラーなので、面談だけでなく、教室に入って「SOSの伝え方」授業や仲間同士の関わり方を高めるためのエクササイズを通した活動をしています。

構成的グループエンカウンターは小学生から高校生まで大変有効です。特に入学したばかりの中学生や高校生には、自他の理解を高めるために有効でした。

子供たちの相談内容で最も多いことは人間関係の悩みです。児童生徒と個別に面談してその訴えに対してアドバイスをしても、彼らが教室に戻った時、受け止める学級が親和的であればいいのですが、そうでないときは、人間関係は

なかなか改善されません。

そこで学級にお邪魔して関わり方のスキルを知らせたりロールプレイをしたりするなど、個別支援と集団アプローチの両方を進めています。特にこの3年間は新型コロナ感染対策で子供たちはマスク生活を余儀なくされていました。学校カウンセラーとして、子供たちの積極的な人間関係作りの一助を担えればと思い、活動しています。

2 保護者支援

お子さんの問題を解決するために始めた面談で、相談者のお母さん自身が、ご自身の抱えている悩みに気付くことがあります。子供が落ち着かないということを話すうちに、「気になることがあると、夜も眠れない」など、ご自身の訴えに替わることもありました。面談を通して家族の抱えている問題に気付くこともできました。さらに、お母さんの心の状態をできるだけ穏やかにすることで、子どもさんが落ち着いてきたこともありました。

子育ては終わりのないことで、誰かにほめてもらうことがほとんどありません。今後も、ご家族の方との今までの関わりをねぎらいながら、一緒にお子さんのことを考えていく活動を、学校カウンセラーとして大切にしていきたいと考えております。

(文責：幸脇 弥生)

☆ 事務局より ☆

支部会員の方で、会費の納入の仕方が分からないという方は、一度事務局までご連絡ください。

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第32号

2024年5月3日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ：<http://jascg-gifu.net/>